

東京合唱協会

東京合唱協会は、'84年4月に結成されたプロ合唱団で、5周年を迎えた。

この5年間に公演回数も飛躍的に伸び昨年は年間120ステージを数えた。オペラや色々なコンサートでソロ活動をしている声楽家を中心にして組織され、これまでに定期演奏会、各地での特別演奏会、ファミリーコンサート、オペレッタ公演の他、学校音楽鑑賞教室、NHK学校放送、教育用レコードの録音等、教育関係でも幅広く活躍している。特に定期演奏会の模様は、「音楽の友」でも大きく取り上げられ、NHK-FMやTBS「百万人の音楽」からは特集番組として放送されて話題を呼んだ。

ニューシティ室内管弦楽団

61年秋に、常任指揮者内藤彰を中心に結成された。通常30人位の編成で、ファミリーコンサート、協奏曲や、オペラ、バレエの伴奏、学校音楽鑑賞教室、各種の録音等、昨年は約60ステージをこなしてきた。

常任指揮者：内藤彰

名古屋大学理学部卒業、在学中より山田一雄氏に師事し、多くの合唱団で活躍。その後桐朋学園大学研究科(指揮専攻)修了。同大学にて小沢征爾、秋山和慶、尾高忠明の各氏に師事。1983年まで山形交響楽団専属指揮者を務める。他に東京交響楽団、新日本フィル、東京フィル、東京シティフィル、新星日本交響楽団他、多くのオーケストラを指揮してきた。

東京合唱協会

常任指揮者

内藤 彰

指揮者

家田厚志

インスペクター

山本義人 遠藤恵子

ソプラノ

池田友美

今村由美子

岩井秀子

ト部博子

遠藤恵子

栗田真希子

小林悦子

貝野裕美子

田中美香

山館ア子

吉海江令子

テノール

有銘哲也

勝田達夫

加藤信行

船橋研二

山本義人

吉田 顕

アルト

石田幸子

稲葉洋子

北川 桜

釘本涼子

小山はる美

鈴木光子

千川美幸

園田りか

田村真寿美

林 里花

古市尚子

バス

秋山 徹

石井敏郎

上田真史

大沢 建

篠崎常幸

東嶋正彦

ピアノ

清水良枝 高畑多恵 松村結子

●主催/東京合唱協会 ●協賛/アルファ芸術協会

■5周年記念コンサート・第7回定期演奏会■

東京合唱協会

邦人作曲家の宗教音楽による

メッセージ

——管弦楽伴奏による——

1989年4月23日(日)2:00pm/東京文化会館(小ホール)

「東京合唱協会」のみなさんとは、「合唱の祭典」(日本作曲家協議会と共催)で一緒しました。当協会の、第2・3・4・5・6回の定期公演を兼ねた、このコンサートでは、多くの邦人作品が演奏され、日本を代表する作曲家たちも協演しました。

この時の演奏は、誠に印象深く、熱心な演奏態度とともに、聴衆や、作曲家たちを、大いに満足させてくれました。

この度の、邦人作品による宗教音楽の集大成を並べた。第7回の定期公演は、ユニークにして意義ある企画で、心から声援と拍手を送るものです。

今後のご発展をお祈りするとともに、プロ合唱団の少ない折から、その貴重な一角として、内藤彰氏のご指導により、より優れた合唱音楽への充実と、演奏の成果を期待して止みません。

1989年4月 山本 直純

プログラム

混声合唱と管弦楽のための **ヨハネによる福音**

高田三郎 作曲

混声合唱組曲 **浄土**〔管弦楽版初演〕

江間章子 作詞 三木 稔 作曲

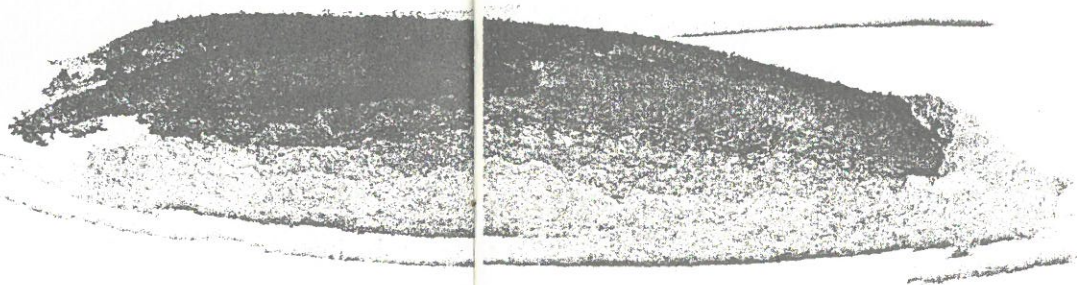
カンタータ **マリア観音**〔女性合唱〕

藤原千鶴子 文 藤原義久 作曲

●独唱 岩井秀子 ●朗読 伊左次美江

ミサ プリバータ 私的ミサ〔初演〕

MISSA PRIVATA 伊藤幹翁 作曲



邦人作曲家の宗教音楽によるメッセージ(管弦楽伴奏による)

西洋音楽の歴史は言うまでもなく宗教音楽の発展と共に築かれてきました。しかし、近年世界的にめざましい発展をとげてきた日本音楽界も、こと宗教作品に関しては、いまだその大半を外国作品に頼っているのが現状であります。そこで一石を投ずる意味も含め邦人作曲家の宗教作品を集集してみました。

今回の公演では、特にオーケストラをイメージして創られた4曲を取り上げ、これらに新たなオーケストレーションや編曲を施しました。ピアノ伴奏だけでは到達し得ない創作者の深い心の叫びを、最善の条件下で皆様にお届け出来るものと信じております。

混声合唱とピアノのための ヨハネによる福音

高田三郎作品

I. 初めにみことばがあった

ヨハネ福音書 第1章第1節～14節

初めにみことばがあった。
みことばは神とともにあった。
みことばは神であった。
みことばは初めに神とともにあった。
すべてのものはみことばによってできた。
できたもので、みことばを離れてできたものはひとつもない。
みことばのうちにはいのちがあり、
そのいのちは人の光であった。
この光はやみの中に輝いている。
やみは光を受け入れなかった。
神からつかわされた人がいた。
その名はヨハネ。あかしののためにかれは来た。
光についてあかして、
かれによってすべての人が信じるために。
かれは光ではなく、
光についてあかしするために来た。
みことばはまことの光、
世に来て、すべての人を照らす光。
みことばは世にあった。
世はみことばをとおしてできたが、
世はみことばを認めなかった。
自分の家に来たが、
家の者は受け入れなかった。
しかし、みことばを受け入れて、
その名を信じる人には、
神の子となる権能が与えられた。
血筋からではなく、肉の欲からではなく、
人の欲からではなく、神から生れた者。
みことばは人となり、
わたしたちのうちにお住みになった。
わたしたちはその栄光を見た。
父からの、ひとり子としての栄光であり、
恵みと真理とに満ちていた。

II. 一粒の麦が地に落ちて

ヨハネ福音書 第12章第24節～26節

一粒の麦が地に落ちて死ななければ、
ただ一粒のまま残る。
しかし、死ねば豊かに実を結ぶ。
自分のいのちを愛するものは、
そのいのちを失い、
この世でのちを惜しまぬ人は、
それを保って永遠に生きる。
わたしに仕えようとする人は、
わたしについて来なさい。
わたしがいる所に
わたしに仕える人もいる。

III. 父よ、時が来ました

ヨハネ福音書 第17章第1、4、5、6、8、9、17、18、19、20、21、23節

父よ、時が来ました。
わたしはあなたに命じられた業を成し遂げて、
地上であなたの栄光を現しました。
父よ、今、み前でわたしに栄光を与えてください。
世が造られる前から、
あなたのものでわたしが持っていたあの栄光を。

あなたがこの世から選んで、
わたしに任せられたひとびとに、
わたしはあなたの名を現しました。
彼らはあなたのことばを守って来ました。
彼らはそのことばを受け入れ、
わたしがあなたのもとから出て来たことを悟り、
あなたがわたしを遣わされたことを信じています。
わたしは彼らのために祈ります。
真理において彼らをあなたのものとしてください。
あなたのことばこそ真理。
あなたがわたしをこの世に遣わされたように、
わたしも彼らをこの世に遣わしました。
彼らのために、わたしは身をささげます。
彼らも真理において身をささげる者とされるために。

また、彼らのことばを聞いて、
わたしを信じるひとびとのためにも祈ります。
父よ、あなたがわたしにおり、
わたしがあなたにるように、
彼らもわたしに在るようになさってください。
あなたがわたしを愛されたように、
彼らをも愛されたことを
この世が知るために。

この曲は、新約聖書ヨハネの福音書第1章第12章と第17章の中よりとられている。

高田氏は、演奏会用や教会の礼拝用等に、数多くのキリスト教音楽を書いているが、常に、聖書の「ことば」が聞く人の心に何か残すことを深く願って書き続けられている。

「水のいのち」等で知られる親しみやすい書法とは違い、無調性で書かれたこの曲は、一見難解ではあるが、現代音楽独特の音のぶつかり合い、濁りの中から、キリストの深い苦悩と祈りがにじみ出るように見事に表現され、重ねて聞けば聞くほど深い響きとなってくる。蛇足ながら理解の一助になればと思い簡単な注釈を記した。

- (1)キリストの生い立ちと使命について
みことば…神のことばを伝えるキリストのこと。
やみ……キリストを迫害した人達。 家……国(ユダヤ)。
- (2)キリストの十字架による救いを例えたもの。
- (3)キリストが、神からの使命を全うし、天に帰る前の祈りと願ひ。
父、あなた……神。 時……天に帰る時。 彼ら……弟子達。

混声合唱組曲

浄土(管弦楽版初演)

江間章子作詞 三木 稔作曲

I. アヤメに寄せて

舞う
紫の炎
紫の想い秘めて
紫のときを舞う
遠い幻よ
雨の晴れ間
人の世も かくあれと
その日の悲しみを舞う

II. まんだら

風がはこぶ まんだら
花がふちどる まんだら
空のはてまで まんだら
北方の王者の夢の跡に
土埃りが舞いあがる
わびしい風景
人影もないバス停の名は
祇園……
風がはこぶ まんだら
花がふちどる まんだら
空のはてまで まんだら

III. 願文

鐘がなる
鐘楼の鐘がなる
人の世の苦しみをとりのぞき
たのしみを与え
魂はあの世に去っても
塵となって 土に残るものよ
鐘がなる……
平和国家を夢みた
地上極楽都市を描いた
鐘がなる
その想いをひびかせ
鐘楼の鐘がなる

IV. 燃えあがる平泉

あ、この世のみにくさも
人の争いも 赤い炎となり
もえる もえる
あ、もえる もえる
地上に築いた浄土
黄金色の浄土ももえあがる
あ、みちのくの夢
もえる もえる
赤い炎となる あ、

IV. 燃えあがる平泉

あ、この世のみにくさも
人の争いも 赤い炎となり
もえる もえる
あ、もえる もえる
地上に築いた浄土
黄金色の浄土ももえあがる
あ、みちのくの夢
もえる もえる
赤い炎となる あ、

Va. 土の中から聞えてくる

〈レクイエム I〉
どどどどどどどどどど
土の中から聞えてくる
耳をすませば聞えてくる
蝦夷 蝦夷 蝦夷と
呼ばれた者たちの つぶやき
どどどどどどどどどど
土の中で押し合いながら
蝦夷 蝦夷 蝦夷と
呼ばれた者たちの
生々しい声
地上を恋うる声
人を恋うる声

Vb. 冬は冬の野づらを

〈レクイエム II〉
どどどどどどどどどど
冬は冬の野づらを 風を走らせ
春は春の森の道を 花で飾る
そして夏は そして秋は
どどどどどどどどどど
そして人は
川原になびく す、きのように
どどどどどどどどどど
冬は冬の野づらを 風を走らせ
春は春の森の道を 花で飾る
そして夏は そして秋は
そして人は
川原になびく す、きのように

この作品は人間の浄土願望を想いつつ、平泉の黄金文化の跡、蝦夷と呼ばれた者たちの夢をたくる組曲である。

昨年カワイ出版より出版された合唱組曲〈浄土〉はピアノ伴奏用であるが、今日のコンサートで演奏される曲の中心部分を成している。

1980年、藤原清衡850年祭にちなんで、岩手放送は記念のドキュメンタリー・ドラマ〈平泉詠唱〉を制作した。その音楽を担当した三木稔氏は、江間章子作詩の「アヤメに寄せて」「燃えあがる平泉」「土の中から聞えてくる」「冬は冬の野づらを」をオーケストラ伴奏で作曲し、88年「まんだら」「願文」を追加してピアノ伴奏による合唱組曲〈浄土〉が完成、初演された。

このテレビドラマの中にはその他にもオーケストラだけの部分や歌詞を伴わない合唱部分もあり、作曲者の意志・監修のもとに今日のために清水祥平氏がより大きなオーケストラ編成に編曲した版を使用する。

カンタータ
マリア観音

藤原千鶴子 文 藤原義久 作曲

1. 序 奏 (Prologue)

Ave Maria, Regina Martyrum.

アヴェ・マリア、殉教者の元后。

2. 出会い (Revelation to a Maiden)

ヒンエー

野母浦のあれさ娘は

日本で一の手ききや

ヒンエー

五つでは糸もよりそよ

七つでは綾をおりそよ

Regina caeli, lætāre, allelūja:

天の元后 よろこびたまえ。

3. ラオダテ (Laudate)

Laudate Dōminum omnes gentes,
laudate eum omnes pōpuli
quōniam confirmāta est super nos
miseri cōrdia ejus
et veritas Dōmini manet in aeternum.

もろもろの民よ 主をほめよ
もろもろの国よ 主を崇めよ
われらへの主の愛は強く
その真実は とこしえなる

Gloria

栄えあれ。

ラオダテ ドミノン ゼンテ

ラオダテ イヨ ミズ ポルトリ

コニヤ コヘリマスタ イツ スミリ ノ

ソ コンレヤン ゼンシュ

イツ グルリヤントス ドミノン マニョ イ テンナン

4. うわさ (Rumours)

まさか そんな 恐いし だいそれたことを、

あれさ娘が、(……娘を、……娘は)

赤い血を飲んだとは、

まさか ほんととは、

観音様をサンタ・マリアと、サンタ・マリアを観音様と、

おそれながらと訴え出れば、

銀何枚に、

キリシタンとは、

キリシタン、シッ。

5. 踏 絵 (Sacred Images)

De profūdis clamo ad te, Dōmine:

Dōmine, audi vocem meam.

Crēdo in ūnum Dēum.

深みよりわれ主を呼びたてまつる。

主よ、わが声を聞きたまえ。

われ、唯一の天主を信ず。

6. パライソの寺 (Temple of Paradise)

むむ

参ろうやなあ 参ろうやなあ

パライソの寺にぞ参ろうやなあ。

むむ

パライソの寺とな 申するやなあ

広いな寺とは申するやなあ

広いなあ狭いは わが胸にあるぞやなあ。

7. 終 曲 (Epilogue)

Ave Maria, Regina Martyrum.

Ecce débiles, per quam flébiles,

salva nos, o Maria!

Tolle languōres, sana dolōres,

ora, ora pro nobis.

アヴェ・マリア、殉教者の元后。

見よ か弱くいと悩む われらを助け

たまえ。おお マリア。

除きたまえ疲れを、いやしたまえ苦しみを

祈りたまえ、祈りたまえ、われらのために。

摩訶般若波羅密多心経観自在菩薩
行深般若波羅密多南無大慈大悲観自在尊

慶長17年、時の江戸幕府によってキリシタン信仰が禁止されて以降、隠れキリシタン達は、カトリック教会典礼の一つであるオラショを歌い、観音様をマリア様と見立ててひたすらに祈りを捧げてきた。

この作品の各楽章を結びつける物語は、「マリア観音」という言葉からイメージされた一つの幻想であって、史実に基づいたものではない。しかし曲のテーマとして使用した民謡、オラショ、グレゴリオ聖歌は、資料を参照した上で作品化されたものである。

原曲の伴奏は小アンサンブルとピアノ用になっているが、今回の演奏にあたってオーケストラのみの伴奏に編曲された。

MISSA PRIVATA

ミサ プリバータ 私的ミサ(初演)

伊藤幹翁 作曲

I. Kyrie

Kyrie eleison

Christe eleison

Kyrie eleison

主よ 憐み給え

キリストよ 憐み給え

主よ 憐み給え

II. Gloria

Gloria in excelsis Deo

Et in terra pax hominibus bonae

voluntatis

Laudamus te, Benedicimus te,

Adoramus te, glorificamus te,

Gratias agimus tibi propter magnam

gloriam tuam

Domine Deus, Rex coelestis,

Deus Pater omnipotens

Domine Fili unigenite Jesu Christe

Domine Deus Agnus Dei Filius Patris

Qui tollis peccata mundi miserere

nobis

Qui tollis peccata mundi

suscipe deprecationem nostram

Qui sedes ad dexteram Patris miserere

nobis

Quoniam tu solus sanctus tu solus

Dominus tu solus Altissimus Jesu

Christe, Cum Sancto Spiritu in gloria

Dei Patris. Amen

天に於ては 天主に 栄光あれ
地に於ては 善意の人に平安あれ

我等主を 讚美し、主を祝し
主を礼拝し、主に栄光を帰し
主の栄光の大なるがために主に
感謝し奉る。

主なる神、天の主、神たる全能の
父

主よ 独生の子イエズス・キリスト
よ、主なる神、神の羔 聖父の聖子
世の罪を除き給う主よ 我等を憐
み給え

世の罪を除き給う主よ

我等が祈禱を聴き容れ給え

聖父の右に坐し給う主よ、我等を
憐み給え。

主は 即ち 唯一の聖者 唯一の主

唯一の最高者にて在す イエズス

キリストよ。聖霊と共に神たる

聖父の栄光にあり。アーメン

III. Sanctus

Sanctus Sanctus Sanctus, Dominus Deus

Sabaoth

Pleni sunt coeli et terra gloria tua

Hosanna in excelsis

聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、
万軍の神は主、

主の栄光は天地に光満てり。

いと高き處にてホザナ

IV. Agnus Dei

Agnus Dei, qui tollis peccata mundi

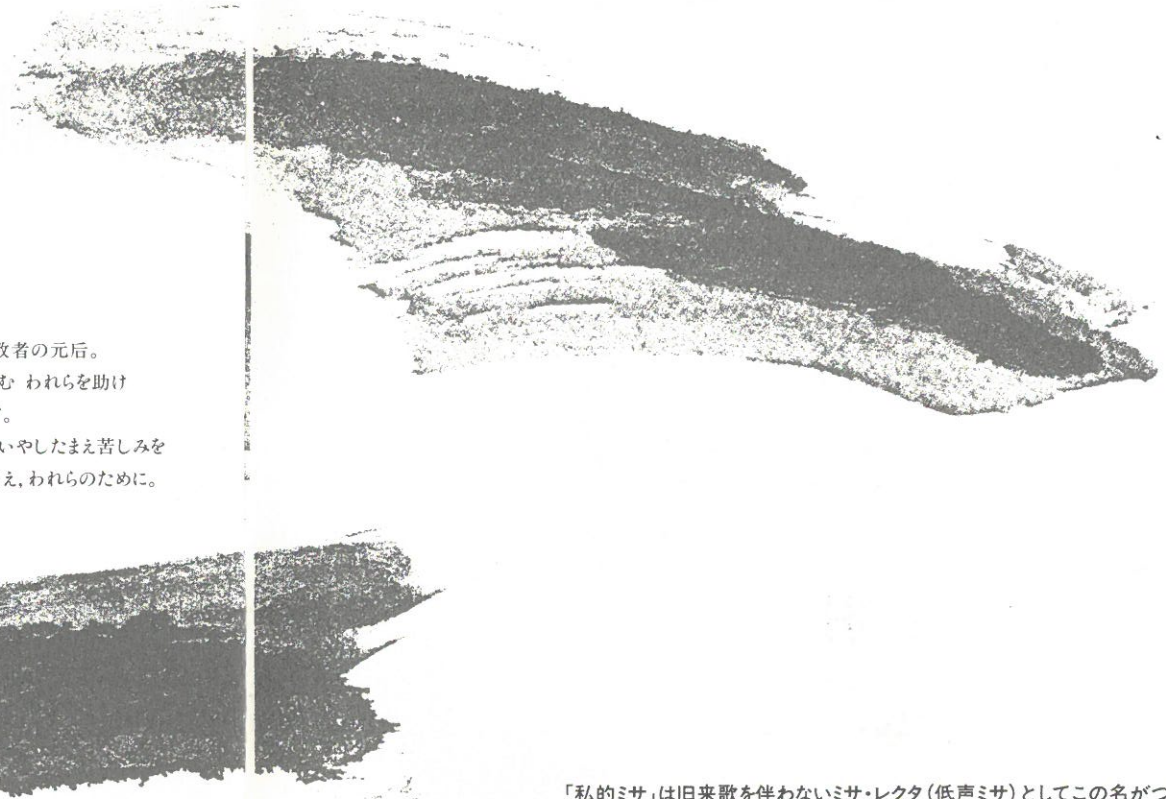
miserere nobis

Agnus Dei qui tollis peccata mundi,

dona nobis pacem.

世の罪を除き給う神の羔、我等を
憐み給え、

世の罪を除き給う神の羔、我等に
平和を興え給え。



「私的ミサ」は旧来歌を伴わないミサ・レクタ(低声ミサ)としてこの名がついていた。ここでは、このプリバータ(ラテン語・英語のプライベート)を、公的なものに対して私的なもの。つまり個々の人々の神への信仰において、通常の社会的な形式や、その他に束縛されることなく、自由な対話や、情況、時間、空間を、私的には持つことが許されるという意味としてとらえられている。演奏会用ミサ曲として書かれたこの曲は、美しいラテン語のテキストに沿って、憐れみを乞い、神を祝福する中で、旋律はときに、生あるものを持つ喜び、悲しみ、苦しみを歌いあげてゆく。そして心の平安、世界の平安を願い、祈ってゆく。西洋音楽はそのほとんどがキリスト教文化による遺産であるといえよう。それゆえ、そこになりたっている現在の音楽家、演奏家は、そのことを一時的にも忘れるわけにはいかない。

五周年記念 コンサート 東京合唱協会

プログラムのメッセージに「……こと宗教作品に関しては、いまだその大半を外国作品に頼っているのが現状であります。そこで一石を投ずる意味も含め邦人作曲家の宗教作品を特集してみました……。」とあるように五周年を期して大変に野心的な試みも含まれている音楽会でもあった。

まず曲は高田三郎作曲の「ヨハネによる福音」混声合唱と管弦楽のための曲で（管弦楽はニューシテイ室内管弦楽団で指揮者、内藤彰を中心に結成された。）クリスチャンである作曲者の心情をよく表わしている曲であって、プログラムには一見難解だとあったが、そんなことは全くなく、作曲者の他の作品と同じく親しみやすいメロディーが随所に流れ、非常に庶民的な曲である印象をもった。

さて、演奏もなかなか素晴らしくことに女性の澄んだ声は宗教音楽にむいた発声であったと思われる。

次いで三木稔作曲「浄土」江間章子作詞で、これぞ民族的な宗教観を歌った曲であると思われる曲であった。宗教というと妙に抹香臭い雰囲気をもつことが多いなかで、この曲はそのようなかたよった精神でなく、江間章子の詞にあるように大自然と人間との美しい融合による宗教観といったものが実によく表現されていたと思われる。

演奏はこれもなかなかの熱演で、それに合唱の発声がこの詞と実に合っているように思えたし、ことに男性の日本的な声はこの曲に良く合っているようだった。ただオーケストレーションが少々技巧的に走りすぎている気もしたが、一応変化に富んでおり立体的な感じもでていたと思う。

休憩をはさんで、藤原義久作曲カンタータ「マリア観音」藤原千鶴子の文で、女性のナレーション付きで、隠れキリシタン達の迫害の様子を歌った曲で、作曲者は「マリア観音」という言葉からイメージされた一つの幻想——から作られた曲であって史実には基いたものではないと云われているように隠れキリシタンの要素を一幅の絵画のように見つめられたとも思える作品であった。

演奏はプロ合唱団に応々にしてあるような

発声だけが浮ついた内容の乏しい声ではなく宗教的な曲によく合った発声で聞きこたえがあった。

最後は伊藤幹翁作曲、「ミサ・プリバータ」という曲でテキストはミサ通常文のベネディクトスを抜いた、キリエ、グロリア、サンクトス、アニュスデイの四章からなっており、実に穏やかな美しい曲で、全曲を通して作曲者の沈静された精神が伝ってくるような作品であった。演奏もこの曲のもつ穏やかな清浄さといった内容をよくだしていたようであったし、日本人である作曲家がカトリックのミサ通常文による作曲であるのに殆んど違和感を感じられないことも一つの収穫ではなからうか。

さて最後に一つ注文を言わせていただくならば、指揮者内藤彰氏の曲に対しての自己主張があまり欲しかったが、これも回を重ねるごとに指揮者の個性も確立されていくことだろう。

（四月二十三日 文化会館小ホール）

原田 稔

